

ツチフキいろいろ

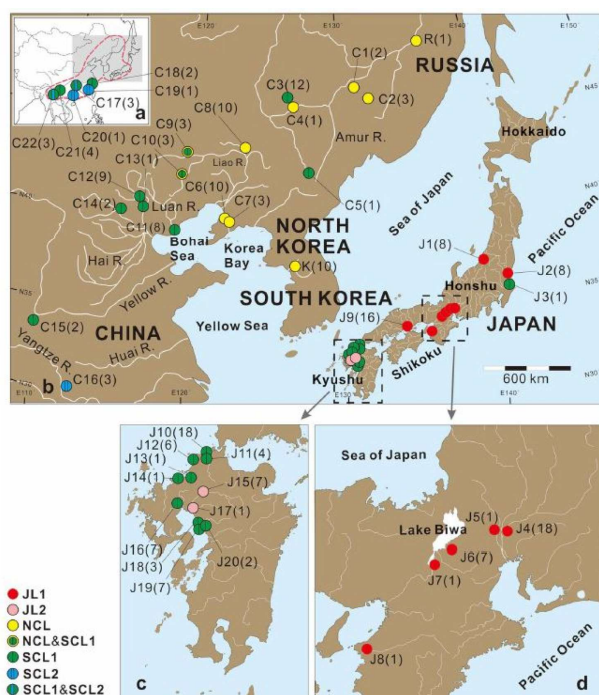
「ツチフキ」という魚を皆さんはご存知でしょうか。全長 4～10cm ほどのコイ科の底生魚で、口に含んだ土をえら孔から吹き出すような動作からツチフキです。最近ちょっと話題になってニュースでも取り上げられましたが、ツチフキについて知っている人はかなり日本の淡水魚に詳しい方、捕まえたことがある人はほぼマニアと言っていいでしょう。食用にされることも、釣りなどの遊魚の対象とされることもありません。見た目は茶色くて地味だし、飼育も難しいので、一般にその対象にもなりません。水辺に親しむ会の例会で毎回必ず捕れるカマツカ種と間違われることもあります。見た目も紛らわしい、そんな雑魚のひとつです。かつては淀川水系にも数多く生息していたようですが、宅地化などによる生息環境の破壊、圃場整備による水路のコンクリート化、外来肉食魚による食害などの影響で、この数十年で著しく減少しました。環境省版レッドリストでは絶滅危惧 IB 類に選定されており、淀川では 1994 年以降見つかっていませんでした。

そんなツチフキが 2022 年、大阪府淀川で約 30 年ぶりに発見され[1]、その後も淀川水系での発見が続いています。私たち親子は 10 年ほど前から近畿のいくつかの場所でツチフキを捕まえていましたが、「最近、琵琶湖周辺で個体数や確認できる場所が増えてきたなあ」と思っていたところでした。淀川での発見がそれと関係あるかどうかかわからないし、増加の要因は不明とされていますが、激減した在来魚種が回復傾向にあるとすれば、それはすばらしいことに違いありません。その他の在来種も含め、生息環境が好転している兆しであることを願います。

ツチフキは、中国東部、朝鮮半島、日本にいたる東アジアに広く分布しています。日本国内では、本州の琵琶湖・淀川水系以西の太平洋側と九州北部に自然分布しているとされていますが、ヘラブナの放流などに混ざって関東や濃尾平野などの各地に移植されています。そして、2019 年に出された論文[3]で、下記が示されました(図 1)。

- ・東アジアに分布するツチフキは遺伝的に 4 つの系統が存在
- ・日本には 4 系統のうちの 2 系統（日本固有系統と外来系統）が分布
- ・日本固有系統は、数百万年の歴史をもち、濃尾平野・近畿地方・山陽地方と、九州北部に分布し、両者（順に JL1 と JL2）はかなり遺伝的な距離（2 百万年前後）
- ・九州北部と関東には外来系統のツチフキも生息
- ・濃尾平野のツチフキは近畿から人為導入された可能性が高い

私はこれまで近畿以外にも、九州北部や関東でもツチフキを捕まえていて、それらの見た目の印象がずいぶん違うと思っていました。今回は 4 つの地域について、そこで捕った個体を紹介したいと思います。ただし、以下に記す内容は、私が感じる違いを定性的に示したに過ぎず、遺伝的な解析をした結果をもとにしてはいたるものではありません。また上記論文には各系統の形態的特徴は示されておらず、私が捕った各地域のツチフキの見た目の特徴が、系統のそれと一致しているかどうかはわかりません。



▲図1:ツチフキの分布

見た目の違いを述べる前に、共通する外観的特徴を整理しておきましょう。ツチフキの全長は 4～10cm 程度で、体は薄褐色、背面と側面に暗色斑があり、体側には黒点が散在しています。口は下向きで口の両端には短い 1 対の口ひげがあり、成熟した個体では上あごの後ろの背面が一部くぼみます。産卵期の春になると、雄は顕著な二次性徴を示し、やや厳つい姿になります。雄は雌よりも大きくなり、背びれを伸ばし、胸びれの前縁に尖った小さな突起（追星と言います）をいくつも出現させます。また、胸びれ以外のひれを黄色から薄い橙色に染めます。